



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	活動報告：子ども支援研究部門
Author(s)	宮崎，隆志；日置，真世
Citation	子ども発達臨床研究，3，62-63
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38185
Type	other
File Information	9_p62-63_K0D.pdf



子ども支援研究部門

1. 概要

子ども支援部門は、生きづらさを抱えた子ども・若者・家族の地域的支援の課題と方法を究明することを課題としている。本年度は、社会的に排除された若者たちの移行過程に焦点を当てて、移行の困難性の解明と移行支援の課題と方法を探究することに課題を絞り込んだ。

2008年5月にはネットワークサロン釧路の代表であった日置真世氏を助手として迎え、実践に内在した理論研究を展開する条件が整った。

2. 活動状況

具体的な調査等は以下のように実施した。

- ①2008年6月 浦河べてるの家参与観察
- ②2008年6月 ネットワークサロン釧路支援実践調査
- ③2008年7月 ネットワークサロン釧路に関するワークショップ
- ④2008年7月 大雪青少年交流の家「職セミナー」参与観察調査
- ⑤2008年8月 若者自立塾、横浜市ユーストライアングルに関する調査
- ⑥2008年9月 大沼学園卒業生追跡調査の検討会（「ふくろうの家」高橋氏）
- ⑦2008年10月～12月 ネットワークサロン釧路当事者・支援者調査
- ⑧2008年10月 北アイルランド調査
- ⑨2008年12月～2009年2月 北海道若者サポートステーション当事者調査
- ⑩2009年1月 浪速高校調査
- ⑪2009年2月～3月 青少年自立支援施設ビバ当事者調査
- ⑫2009年2月～3月 大沼学園卒業生追跡調査
- ⑬2009年2月～3月 職セミナー関係者調査

①②は地域生活への移行支援実践の2つの典型として、比較研究に展開している。SST・当事者

研究のようなプログラムの有無、支援スタッフの役割の差異などについて、学外研究員の向谷地生良氏を交えた検討を開始した。ネットワークサロン（釧路）の支援実践については本誌日置論文を参照されたい。

④⑬は美瑛町内の農家等での職業体験を基軸にした若者支援諸団体の協同支援実践に関する調査であり、学外研究員の穴澤義晴氏とともに実践分析を行っている。

⑥⑦⑨⑪⑫は移行支援組織の協力を得た当事者追跡調査である。その成果の一部は、本誌所収の宮崎論文に反映されている。また、この調査では学内研究員の仲真紀子氏の協力を得て、Life Script 調査を継続している。当事者の「人生イメージ」に迫る調査として発展させる可能性が浮上してきている。

⑧は北アイルランド・デリー市を中心にした移行支援実践の比較研究である。Life Start FoundationのPauline Mcleghnahan氏の協力を得て、子育て支援から若者支援に至る支援実践の比較およびLetterkenney Instituteにおいて国際ワークショップを開催した。活動理論を基盤とした地域成人教育論の可能性について確認することができた。

⑩は文化的境界を生きる若者たちの支援実践に関する分析である。学外研究員の石黒広昭氏・藤野友紀氏を中心に、授業過程分析を含めた調査を実施している。昨年度までの理論的検討の成果は、石黒編の報告書として刊行した。

3. 到達点と課題

生きづらさの構造については、自己内他者の形成と人格の構造との関連に着目した分析枠組みの有効性を確認しつつある。人格的自立の構造的把握の枠組みを精緻化しつつ、家族・学校・地域・企業等のコミュニティの構造変動を統一的に把握することが見通せるようになってきた。

支援実践については、「地域支援コンソーシアム」として支援組織間の関連を視野に入れた分析枠組みの必要性を確認している。移行過程支援を単一の支援組織に閉じて構想することの非現実性は自明であるが、連携的支援を当事者の移行過程に即して把握するためには、独自の分析枠組みが必要であろう。

移行概念の再定義やそれに基づく新たな移行類型の提起については、宮崎論文を参照されたい。

今後は、以上の理論的枠組みを精緻化し、収集データに基づく実証を行うことが課題となる。その成果は次年度にいくつかの学会において発表するほかに、独自に国際シンポジウムを開催し、発表することを予定している。

次年度はこれらの理論的整理と同時に、地域支援コンソーシアムに関する形成実験に着手することも課題となる。

(宮崎隆志・日置真世)